

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：42705

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13227

研究課題名（和文）総合大学における聴覚障害学生のキャリア発達及びその促進と抑制に関する縦断研究

研究課題名（英文）Longitudinal study on career development of university students with hearing impairments and its promotion and suppression.

研究代表者

杉中 拓央（SUGINAKA, Takuo）

小田原短期大学・保育学科・専任講師

研究者番号：70755917

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚障害を有する総合大学の学生に対して、入学時から卒業時まで四箇年にわたる縦断調査を行い、彼らのキャリア発達について表象を得ることができた。しかし、休学・退学等による調査対象者の減少や、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、今後は対象者一人ひとりを事例的に分析することを検討する。なお、本課題は前倒し採択を受けたため中途終了し、最終年の結果と総合的な分析結果は新規課題をもって報告する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

聴覚障害者は、自身の障害に対する自己理解・自己吟味が不足することによって、早期離職の傾向にあることがいわれている。そのため、学生の時分よりさまざまな可能性に触れ、自らに適性のあること・ないこと、やりたいこと・やりたくないこと等を自主的に選択していく機会が求められている。しかしながら、上述した事象は周囲の者により経験的に語られている側面もあり、実証的研究をとおして、彼らの心理的発達を把握する。

研究成果の概要（英文）：A longitudinal study of hearing-impaired students enrolled at university was conducted over a four-year period from the time of admission to graduation. However, this study was affected by a decrease in the number of subjects surveyed due to leaves of absence and withdrawals, as well as the COVID-19 infection, which made the analysis difficult in some respects. Therefore, this study is considering switching to a case-based analysis in the future. Incidentally, this study was terminated midway due to the adoption of a new project. The results of the final year and the overall analysis will be reported in the new project.

研究分野：特別支援教育

キーワード：聴覚障害 キャリア発達 混合研究法 縦断調査 大学生

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、大学等高等教育機関における聴覚障害学生の学びに対しては、要約筆記や手話通訳等の情報支援が配置されている。

しかし、学び得た知識を活かし、卒業後の生活に対する見通しを持つためには、彼ら固有の精神構造や心理的課題に目を向け、そのキャリア発達についても支援していく必要がある。

わが国の聴覚障害教育におけるキャリア発達 (Career Development) の概念は、キャリア教育の導入過程において、就職するための技術や態度、自己開示力等を示すものと理解されがちであった。

無論それらも重要であるが、本来の概念を引けば、キャリアには発達段階に応じた「将来のための課業 (Work)」という視点が欠かせない。学生にとっての Work とは学業であり、すなわち、学生生活をとおして自分が何者であるのか、自己吟味をはかることで、就労も含めた、調和した将来像を探るという行為が不可欠である。

若年聴覚障害者の早期離職の多さについては、近年、サンプルサイズこそ小さいが実証されている (高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター, 2017)。その原因としては、雇用側の聴覚障害に対するステロタイプや、聴覚障害が有する不可視性から来る、ミスマッチ等が指摘される。

これに加えて、本研究では聴覚障害学生のキャリア発達の未成熟や、あるいは彼ら特有の減算の将来展望に問題の根があると仮説を立て、2018年度より四力年の縦断研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究が最終的に明らかにしたい事項は以下の3点においた。

聴覚障害を有する大学生のキャリア発達の実態と、進級による縦断的变化

聴覚障害を有する大学生のキャリア発達を促進あるいは抑制する個人要因の同定 (聴力・性差・専攻・コミュニケーションモード・被教育歴・被支援経験・職業経験・相対年齢効果等)

各尺度における標準化データを用いた聴者 / 聴覚障害者の比較検討

以上を明らかにすることで、上述の仮説や、聴覚障害学生のキャリア発達に関する諸相を実証的に解明し、早期よりの介入方法の検討や、彼らの大学における過ごし方の検討に資することを目的とする。

3. 研究の方法

まず、2学部以上を擁する複数の大学に調査の実施を告知し、学内に周知してもらった。研究趣旨を説明後、回答希望のあった聴覚障害のある大学一年生 30 名を対象として、郵送法ならびに手交によって質問紙を配付した。回収後、二重回答や欠損の著しい回答を除いた結果、24 名 (調査時日齢 M=7018 日, SD=122.5 日) が開始時点の研究対象者となった (表 1)。なお、聴覚障害者のための大学に籍を置く者 6 名を含んだ。

まず、デモグラフィックデータとして年齢・性別・生年月日 (データ取得日との間で日齢を取得)・聴力・人工内耳装用の有無・コミュニケーションモード・専攻・被教育歴・被情報支援歴・職業 (アルバイト) 経験の記入を求めた。

次いで、定量・定性の双方を押さえた混合研究法 (mixed methods) の観点から組成したバッテリーへの記入を求めた。具体的には、心理学的に正確な手続きによって標準化された尺度 3 点 (職業レディネス・テスト/進路未決定尺度 / 自我同一性地位尺度) と、宮下の自由記述課題 (つきたい職業について) 1 点によって構成した。

毎年、心理尺度への回答結果およびデモグラフィックデータの各変量に対する探索的な統計分析の他、聴者デー

表 1 研究開始時の調査対象者 (n=24)

属性	回答	度数
性別	男性	14
	女性	10
学部学科	文科系	11
	理科系	13
人工内耳	装用している	7
	装用していない	17
手話による	日本手話	3
	日本語対应手話	12
コミュニケーション	非該当	9
	該当	15
被教育歴 (小~高)	統合教育を経験	12
	ろう学校	12
大学における	受けている	17
被情報支援	受けていない	7

夕の基準値を参照し、聴覚障害学生の職業興味パーセンタイル値において、どの辺りに位置づくかを確認した。本研究は小田原短期大学研究倫理委員会及び筑波技術大学研究倫理委員会の受審と承認を経て十分な配慮のもと行った。

4. 研究成果

(1)2018 年度

Spearman の順位相関係数より無相関検定を行ったところ、調査時年齢と進路未決定尺度の下位尺度「猶予」との間に有意な負相関を認めた ($p < .05$)。要約筆記等の情報支援を受けていないと回答した者は女性が多かったが、人工内耳装用等との関連は認められなかった。

初年度は新生の聴覚障害学生を対象として基礎となるデータを収集することができた。入学して半期を終えた時点の調査ではあるが、聴覚障害者のための大学に籍を置く者を除くと、半数以上、とりわけ女性において、手話通訳や要約筆記といった情報支援を受けていない点がかかるところであった。筆者らの予備調査では人工内耳装用者の被情報支援率が著しく低かったが、本研究においては認められず、その他にも、現時点で関連する要因は見られなかった。

(2)2019 年度

退学・休学・音信不通等の理由から本研究の対象は 16 名 (調査時年齢 $M=7366$ 日, $SD=140.1$ 日) に減じられた。なお、聴覚障害者のための大学に籍を置く者 5 名を含んだ。2019 年度の職業レディネスの平均については、それぞれ前年度差は認めなかったが、前年度同様、A 域 (芸術的職業) 以外は、すべて聴者の基準値を興味・自信とも上回った (図 1)。進路未決定尺度・自我同一性地位判定尺度に年度差、変数の差は認められなかった。

初年度から次年度への遷移については、特筆すべき事項は認められなかった。しかしながら、聴者に比して聴覚障害学生の職業興味や遂行自信が、A 域をのぞいて過大回答傾向にあることや、前年度の分析より被教育歴や人工内耳装用有無等が、影響することも確認されている。ゆえに、ゼミへの所属や就職活動を控える次年度以降のデータに注目したい。また、研究限界として、コロナ禍という要因の介入により、次年度以降、一般的な聴覚障害大学生の姿を定量的に分析することは難しくなったことを明記する。

(3)2020 年度

今年度 (本研究) の対象は 13 名 (調査時年齢 $M=7741.9$ 日, $SD=141.6$ 日) に減じられた。なお、聴覚障害者のための大学に籍を置く者 4 名を含んだ。

Wilcoxon の符号付順位相関検定の結果、職業未決定尺度の下位項目のうち「模索」($p=.08$ effect size $r=.47$) が前年度に比して低減し、「決定」($p=.08$ effect size $r=.48$) が増加する傾向にあった。自我同一性地位判定尺度には違いを認めなかった ($ns.$)。また、初年度から回答が継続しなかった群と、今年度の回答群のデモグラフィックデータを比較した結果、情報支援を受けていない者 (二年目より支援を受けはじめた者 4 名は回答が継続していた) インテグレーションである者の回答が継続しない傾向にあった。大学二年次から三年次への進級にあたり、職業未決定尺度の「模索」が減じられ、「決定」に増加が見られたことで、卒業後を見据え、順調に将来展望をしている様子が窺われる。しかし、職業興味と遂行自信については聴者の大学生に比して、今年度も過大回答傾向が見られる。

また、聴者においては、S 社会的領域と C 慣習的職域以外は自信が興味を下回るが、聴覚障害学生においては、芸術的職域以外で自信が興味を上回っており、この傾向は退学・休学者群の加除により変動することはなかった。したがって、個々の職業に対する吟味が十分になされているか検討を要すると言える。

加えて、今年度も職域間の興味には定量的な「分化」が見られなかった。すなわち、聴覚障害学生は大学生活後半になっても職業に対する選好がなく、万能感を有しているとも解釈できるが、自己吟味が不足している可能性もまた示唆されるものである。

さらに、研究の趣旨からは逸脱するが、当初 24 名であった回答者が減少している点も定量的に留意したい。概ね一年目に退学・休学しており、初年度教育の重要性がより浮き彫りになっているとも言える。

(4)まとめ

本研究は当初四箇年の縦断調査を企図したものであったが、最終年次より基盤研究の前倒し

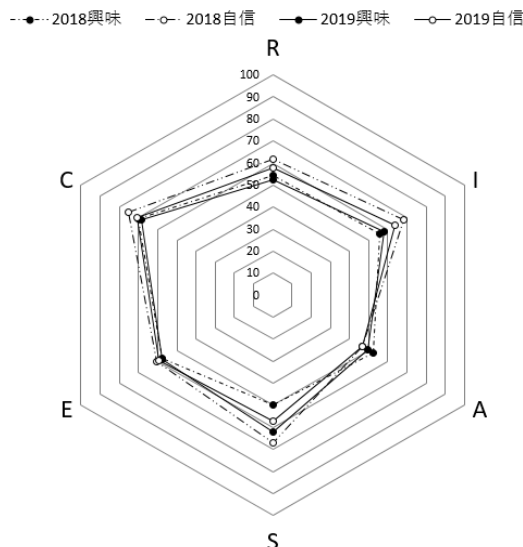


図 1 職業興味と遂行自信の遷移

採択を受けたため、中途終了することとなった。したがって、四年目の調査は上述の研究課題へと引き継がれている。そのため、四箇年をとおしての調査・分析の結果は現在精査をしている段階であり、まとめ次第、論文投稿や学会発表によって成果を発表していく。については、本研究の総括についても、当該の研究課題の成果報告書に、後続する社会人初期の調査と統合して示す予定である。調査対象者の減少や、予測のできないコロナ禍の交絡等を鑑みて、分析方法は一人ひとりを事例的に分析する方向に転換をはかりたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉中 拓央、原島 恒夫	4. 巻 8
2. 論文標題 聴覚障害学生のキャリア発達に関する探索的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 トータルリハビリテーションリサーチ	6. 最初と最後の頁 13~21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20744/trr.8.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 聴覚障害学生のキャリア発達及びその促進と抑制に関する追跡研究III
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会(Web)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 聴覚障害学生のキャリア発達及びその促進と抑制に関する追跡研究II
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会(Web)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 聴覚障害学生のキャリア発達及びその促進と抑制に関する追跡研究
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 青年期にある人工内耳装用者と非装用者におけるワークキャリア観の比較
3. 学会等名 第45回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉中拓央・原島恒夫
2. 発表標題 聴覚障害学生のキャリア発達と職業興味
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 先進校において選択的に支援を受けず卒業・就職した聴覚障害学生の1例
3. 学会等名 第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 聴覚障害学生支援の歴史的経緯と課題
3. 学会等名 第122回発達科学研究交流会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉中拓央
2. 発表標題 手持ちでどこまでゆけるのか？ 助走は何メートル必要？
3. 学会等名 聴覚障害児者のキャリア発達支援 Outreach33.jp 年次報告会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 杉中 拓央, 呉 裁喜, 松浦 孝明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 180
3. 書名 教職をめざす人のための特別支援教育 - 基礎から学べる子どもの理解と支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

聴覚障害児者のキャリア発達支援 http://outreach33.jp/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	香川 龍仁 (KAGAWA Ryuto)	小田原短期大学・研究支援員 (42705)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------